

## 『法華経』の「竜女の成仏」場面

前回までのヘブライ語聖書・新約聖書の話に続き、今回は仏教経典における翻訳の問題の事例をとりあげてみよう。代表的なものとして『法華経 提婆達多品第十二』(鳩摩羅什による漢訳)の「サーガラ竜女の娘、竜女の成仏」の場面に登場する「変成男子」という言葉は、一般には「女性は男性に生まれ変わらなければ仏になれない」といった意味に理解され、「仏教における女性差別」が語られるときには必ずといってよいほど引き合いに出され、槍玉にあげられる箇所である。もしそのような意味合いを含んでいるとするならば、現代に生きる女性僧侶や女性信者が『法華経』読経中にこの箇所に差し掛かると違和感を覚えるというも頷ける。しかし果たして「変成男子」は本来このような意味だったのであるか。

岩波文庫版の『法華経』は、見開き2頁の左側にサンスクリット版からの直接的な日本語訳、右側に漢訳とその書き下し文が取められており、両版を比較するのに便利である。竜女の成仏に関する当該箇所を岩波文庫に当たってみると、漢訳版には「女身垢穢」や「非是法器」(＝女身非法器説)<sup>(1)</sup>といったサンスクリット版にはない女性差別的な言葉が挿入されていることも見逃せない。問題の「変成男子」の箇所は、サンスクリット版では竜女が長老シャーリ=プトラ(舍利弗)ら聴衆の眼前で女性から男性への性器の変化を披露するというグロテスクで不可解な場面なのだが、決して「変じて男子と成った」とは書かれていない。一方の漢訳「変成男子」では、変身の詳細が省かれ、たしかにマイルドな表現になっている分、何を意味するかはまったく分からない。しかし、現世に生きる女性、竜女が(男性への)変身をその場で実演し、実証することによって、女性の成仏の証明を成し得たことと、来世において男性に生まれ変わらないうり女性には仏にはなれない(現世において女性は成仏できない)という位相とでは、かなりニュアンスは異なるものになってしまう。漠然とした漢訳から生ずるであろう後者の解釈が定着する場合の、人々の抱く女性観への影響には計り知れないものがある。

いずれにせよ、大きく見れば、これらは女性の成仏の可能性を提示したものである。とは言え、「おしなべて男性という性への一元化を示す点で、やはり性差別的なものと言わざるをえない」と栗原淑江は指摘する。あくまでこれらは、変成「男子」であって、変成「女子」ではないからである。ここにおいて私たちは、なぜ女性だけが変身したり、生まれ変わらなければならぬのだろうか、という素朴な疑問にたどり着く。

変成男子説は大乗仏教成立前後に登場したが、その思想的基盤は少し前に説かれていた「女人五障説」であると、栗原氏はいう。「五障」の「障」とは「地位」を意味し、女性には就くことのできない5つの地位があるという説である。たとえば『法華経』では、女性は「梵天王、帝釈、魔王、転輪聖王、仏」になれないとされている。これは、当時のヒンドゥー的な女性蔑視の考えを色濃く反映したものとされるが、それにしても一切衆生の救済を説く大乗仏教がそれをそのまま鵜呑みにするも

ののだろうか。栗原氏によれば、そのような女性蔑視の考えをいかに克服し女性にも成仏を約束するかという問題に直面したときに、考え出された苦肉の案が、変成男子説であったという。しかしそれは結局、栗原氏が述べるように、女人五障説を根底から覆すことはできなかったのである。

## 女身非法器説と三十二相観

さて、鳩摩羅什の漢訳『法華経』に新たに書き込まれた「女身非法器説」の方は、特に天台教学を通して日本仏教に流布され、その根底まで浸透していく。鎌倉新仏教の祖師たちにもその影響は及び、「すべての仏、菩薩に見放された女性は、法華経なり阿弥陀の請願による以外に救われる道はないと説いた」のである。この救済の論理の前提となる「女身垢穢」や「女身非法器」といった観念は、当時の社会的な差別のただ中に生きた女性たちにはどうにか受容されたものの、現代の女性たちには到底無理に違いない。そもそも仏教本来の教えとも齟齬がある。一体なぜそのような観念が紛れ込んだのだろうか。もちろん先述の女人五障説の影響も考えられよう。

「女身非法器説」を仏教における女性差別の決定的な原因とみる鶴岡瑛は、その由来を徹底的に考察している。その際、鶴岡氏は三十二相観の中の「馬陰蔵相観」<sup>(2)</sup>に着目し、これを先のサンスクリット版の不可解な「竜女の成仏」の場面と結びつけて論拠とする。三十二相観は、ジャータカ(仏の前世物語)とともに、仏陀を超人的存在として神秘化していく時代の産物であるとされ、仏になることの困難さを物語るものである。仏の特徴として、仏像・仏画でお馴染みの「眉間白毫相観」や「眼色如紺青相観」など32の特徴が挙げられるが、「馬陰蔵相観」もその一つである。鶴岡氏によれば、これはその形状が修行者の禁欲に適しているから採用されたと推測されるが、「これが仏の必須要件ならば、そもそも女性は仏になれないことになってしまう」という。男性修行者の禁欲の必要性から発した「馬陰蔵相観」が定着するにつれ、女性成仏の道は意図せずして閉ざされてしまった。それを再開するために、舍利弗ら長老たちの見守る厳粛な場において、グロテスクな変身の一部始終を明示する仕掛けが必要だったというわけである。鶴岡氏のこのような解釈ならば、サンスクリット版の不可解な出来事の中に潜む明確な意図に納得がいく。それは、限界はあるにせよ、意外にも仏教のジェンダー平等的な自己修正の試みであったと解せるのである。

## [註]

(1) 女身は穢れが多くて仏の器ではないという説。

(2) 馬のように平常は男根が体中に隠れている状態を指す。

## [参考文献]

- ・栗原淑江「女人救済変成男子説」、国際宗教研究所編『女性と教団』ハーベスト社、1996年。
- ・鶴岡瑛「末法史観と女性差別について」、女性と仏教 東海・関東ネットワーク編『仏教とジェンダー』朱鷺書房、1999年。
- ・『法華経(中)』岩波文庫、1976年。